

16 『武器よさらば』

『武器よさらば』(*A Farewell to Arms*, 1929)は、第一次世界大戦当時におけるアーネスト・ヘミングウェイ(Ernest Hemingway, 1899-1961)の伝記的背景を色濃く反映した3作目の長編小説である。語り手のアメリカ人将校フレデリック・ヘンリーは、オーストリア軍の迫撃砲によって重傷を負うほか、近代兵器による大量無差別殺戮という戦争の実像を目の当たりにする。そもそもアメリカの第一次世界大戦参戦前には、ウッドロー・ウィルソン大統領の下で「民主主義を守るための戦い」として、その理想主義に国民が熱狂し、国内に戦意が高揚していた。一方で実際の戦争体験によって既成の価値体系が崩れ去った様子は、フレデリックの有名な独白、「ぼくは神聖とか、栄光とか犠牲といった言葉や空虚な言い回しにはいつも当惑させられた。…栄光、名誉、勇気とか神聖といった抽象的な言葉は、村の名前、道路の番号、川の名前、連隊番号、日付といった具体的なものと比較して卑猥だった」(161)に象徴的に見出すことができる。雨が降る戦場で耳にするほか、掲示板の告示に見出される美辞麗句は、兵士たちにとって卑猥なものでしかないのだ。

フレデリックは、**カポレット (Caporetto)** の退却の際に単独講和を宣言し、「死」をもたらす「武器 (arms)」ではなく、「生」をもたらす「女の腕 (arms)」を選び、イギリス人の篤志看護婦キャサリン・パークレイと共に軍隊から逃亡する。しかしスイスでの平和な生活は長続きせず、キャサリンは死産の後、命を落とす。フレデリックはこのような自らの戦場体験のみならず、最終的に悲劇に終わる男女の愛という運命に耐えて生きるしかない現実認識に至るまでを回想形式で物語っている。

作品全体を通して、**雨 (rain)** が悲劇をもたらすもの、あるいは悲劇的な状況を表象するものとして効果的に使用されている点も本作品の特徴の一つである。物語の冒頭では、「雨で栗の木の葉がすべて落ち、枝はむき出しになり、幹は雨で黒ずんだ。葡萄畑も葉が少なくなって枝はむき出しになり、秋の訪れと共にあたり全体が雨に濡れて茶褐色になり、死んでしまった」と描かれるほか、冬の長雨がコレラをもたらし、軍隊に所属していた7千人がコレラに感染して死んだことが説明される(4)。またキャサリンは、雨を死という不吉な予感をもたらすものとして恐れているが、物語は病院で息を引き取った彼女に別れを告げたフレデリックが、雨の中をホテルに歩いて戻る場面で終わっている。

この物語の設定時期(1915年8月から18年3月まで)は、ヘミングウェイ自身

の実体験（1918年6月から1919年1月）よりも早く、彼は1917年の秋に実際に起きたカポレットの退却を歴史的背景にほぼ忠実なかたちで再現している。しかもフレデリックは後の歴史家が分析するまでは一度も明らかにされなかったイタリア軍惨敗の要因（社会主義者の暴動、食糧不足、宣伝活動など）を把握している（Reynolds 112）。つまり彼は事後でなければ得られない知識を身に付けており、物語の設定時期には存在しえない不自然な兵士として描かれているのだ。

フレデリックの人物造型に着目した際、この物語にはもう一つの不自然な点が存在する。それは物語全体を通しての彼のイタリア人を巡る**人種意識 (racial consciousness)**である。フレデリックは作者ヘミングウェイの初の外国体験となるイタリア滞在当時の様子を彷彿とさせるかのごとく、イタリア人への親密な友愛意識を示している。しかしその一方で、彼はイタリア人を人種的他者として心理的に排除している。彼はアメリカが連合軍を支援し始める以前の1915年にアメリカ人としてイタリア軍に所属した理由を説明できない。しかも17年4月にアメリカが第一次世界大戦に参戦以来、特にカポレットの退却以降には顕著に見られたアメリカ人とイタリア人との異人種間連帯が、フレデリックの場合は中途半端な状態のままで残されているのだ。

このような特殊な描かれ方には、ヘミングウェイ自らの体験と作品の執筆時期（1928年3月から翌年1月まで）のおよそ10年という時間的隔たりが影響を及ぼしていると考えられる。というのも、この時期にヘミングウェイがイタリアに向けた眼差しは、複雑な様相を呈することになるからである。彼が『トロント・スター』紙、および『エスカイア』誌に書き送った記事が明示するように、ヘミングウェイはファシズムのみならず社会主義や共産主義といった当時のイタリアで見られたいずれの思想にも同調することはない。イタリア兵への友愛を示しながらも、イタリア軍に所属することに居心地の悪さを感じ、最終的に完全な非戦闘員になりきれない状況で取り残されるフレデリックのイタリア人意識の背景には、イタリア人への好意的な姿勢と、彼らとは距離を置く思想的立場とが共存するヘミングウェイのイタリア人を巡る複雑な包摂と排除の意識を象徴的に見出すことができるだろう。フレデリックは、自らの体験をフィクション化するに至るまでの時間的流れの中で醸成されたヘミングウェイの特異なイタリア人像を浮き彫りにする主人公でもあるのだ。

（本荘 忠大）